

# 慈濟 238

## ものがたり

慈濟基金會  
2016年10月

TZU CHI ● ツーチャー



2016 ● 10

慈濟ものがたり

N O 2 3 8

慈濟基金會

今月の表紙

慈濟は雲林県虎尾の家の修繕を行った。ボランティアは屋根に登って古くなった瓦をリレー式で取り除き、屋根の防水加工をしやすいようにした。

(撮影・黄筱哲)



表見返し ●

文・證嚴法師／訳・済運／撮影・楊秀麗

## 医者使命

人生で最も苦しいものは病です

医師は仏心で以て

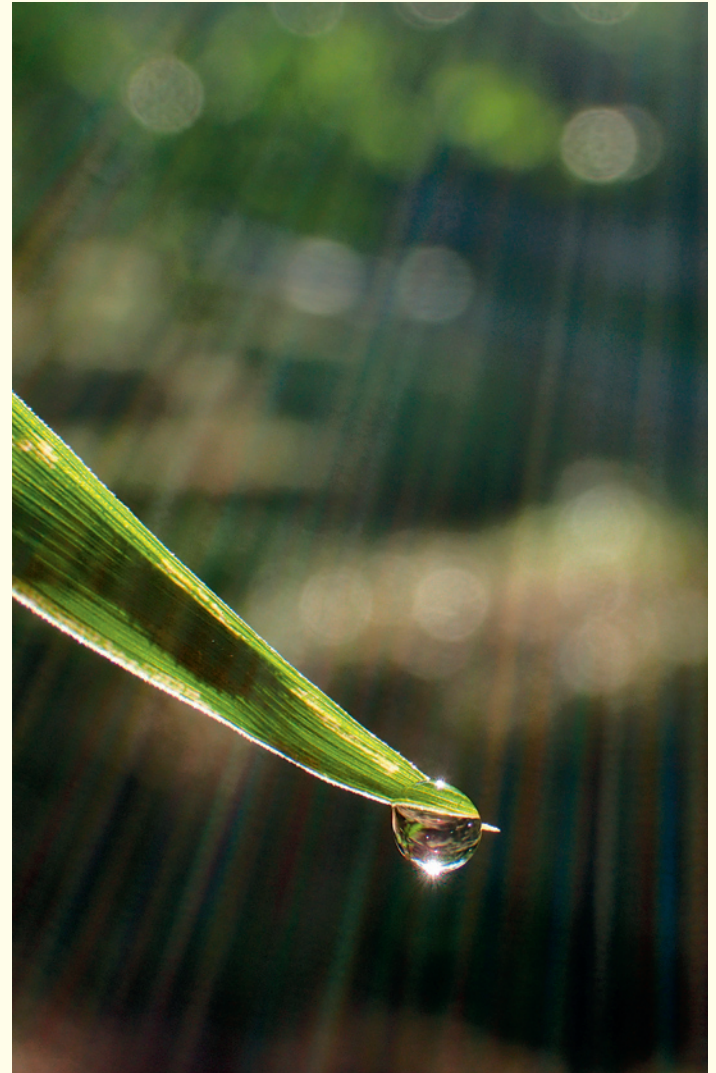
患者を家族のように思い

病を師と仰ぎ

真心を忘れず

医道の志を守り

世に福をもたらすべきです



# 目次

|      |       |      |   |
|------|-------|------|---|
| 【社論】 | 愛の避難所 | 慈願／訳 | 4 |
|------|-------|------|---|

|         |                |      |   |
|---------|----------------|------|---|
| 【本物の食物】 | グリーンレストランが出現した | 済運／訳 | 8 |
|---------|----------------|------|---|

|                         |       |      |    |
|-------------------------|-------|------|----|
| 【慈済道侶の本・慈悲の火を灯し続けて仏の国へ】 | あの百日間 | 慈願／訳 | 32 |
|-------------------------|-------|------|----|

|        |                   |        |    |
|--------|-------------------|--------|----|
| 【特別報道】 | □ 慈善修繕・弱者の家をリフォーム | 済運／訳   | 46 |
|        | □ 住宅リフォームに気配りを    | 黒川章子／訳 | 62 |

|                |                |      |    |
|----------------|----------------|------|----|
| 【お板さんが法の香りに浸る】 | 人の輪に入って、善の縁を結ぶ | 心嫫／訳 | 67 |
|----------------|----------------|------|----|

|            |                          |      |    |
|------------|--------------------------|------|----|
| 【證嚴法師のお諭し】 | 信心、悲願、行いの上では<br>時を無駄にしない | 慈願／訳 | 70 |
|------------|--------------------------|------|----|

|       |              |      |    |
|-------|--------------|------|----|
| 【生活禪】 | 心を修養し良い苗を植える | 慈昶／訳 | 82 |
|-------|--------------|------|----|

|       |                  |      |    |
|-------|------------------|------|----|
| 【人物誌】 | 呂保璇 娘と早朝の法の香りに浸る | 済運／訳 | 84 |
|-------|------------------|------|----|

|        |        |      |    |
|--------|--------|------|----|
| 【納履足跡】 | 人々は観世音 | 慈願／訳 | 95 |
|--------|--------|------|----|

|             |      |     |
|-------------|------|-----|
| 慈済大事記【八、九月】 | 済運／訳 | 106 |
|-------------|------|-----|

|            |      |      |
|------------|------|------|
| 医者 の 使命    | 済運／訳 | 表見返し |
| 漫画《清らかな智慧》 | 済運／訳 | 裏見返し |

## 愛の避難所

◎ 訳・慈願

七月の始めに台風一号が台東を襲って被害をもたらしました。慈済ボランティアは、いまだ恐怖の覚めやらぬ被災者六千世帯の人々を勇気づけるため、九月の月末に吉祥祈願会を催した。そしてボランティアたちは被災者が一日も早く復興できるように付き添い、家屋の修繕などを手伝った。

被災者が受けた陰影と傷が癒えて、安らかな家に戻れるよう、慈済ボランティアは常に第一線で慈善奉仕に努めてきた。多くの被災者が、復元された温かい我が家に入った時に見せる笑顔が、それを実証している。

「家の修繕」は慈済の慈善奉仕の様々な経験の中から、作り出された支援項目である。一九七五年に台風三号が台湾に上陸した時、花蓮は十七年間で最大風速の威力を受けて、台湾で最も被害甚大な地域になっていた。その時の救済で、證嚴法師は多くの被災者は自力で修復できたが、自力で修繕できないのは貧しい人ばかりということが分かった。彼らは公有地に無許可で家を建てたために修繕ができなかったのだ。

その時、静思精舎の屋根も吹き飛ばされて修理の費用に事欠いていたため、ビニールで覆うより方法がなかった。それでも上人は貧しい人々のために、十五戸の鉄筋コンクリート造りの家を建てるための資金調達に、「慈済月刊」に寄稿文を寄せられた。これは慈済功德会が貧困者に家を建ててから三度目になる。今回の規模は以前よりも大きく、土地の購入、建築費用は数十万元以上に達したが、幸い大勢の社会の愛を得て募金が集まった。

慈済のこの十五世帯の人たちに対する関心は、現在も続いており、家の修繕



をしている。この支援は慈済の慈善奉仕の活動における一里塚となって、災難後の復建支援、あるいは貧しい家の修繕を行っている。ボランティアは訪問して実地調査をした後、支援計画を立て修繕している。

台湾社会の福祉制度は向上している。政府の弱者に対する家屋修繕の補助項目はあるものの予算は微々たるもので、ある國が認めて低所得者は補助の申請をしても下りなかった。また貧民に所有権がないため、修繕するとなると、いざこざが絶えず、スムーズにはしなかった。年寄りの貧困者、一人暮らしの人や病人が自分住む環境を整理したくても、自分もできない。申請して補助が下りたとしても、実際に実施するのは難しい。

これらの条件をカバーするのは民間の慈善団体であった。今期の慈済月刊の主題報道にある「台湾宝島善行義勇団」は、弱者を対象にした家の建築、修繕が主要な支援項目だが、例外として政府または企業と慈善団体が協力して行うこともある。慈済ボランティアは村や路地裏や町へ行って、住宅環境の悪い家

や破損しているのを見つけたら報告するように、おただちに修理に協力するかと言っている。

「慈済月刊」の記者と慈済基金会建築士は雲林、彰化の農村の慈済貧困支援家族を訪問した。その多くは祖先が残した竹造りの家に住んで不衛生であった。修繕チームは古い伝統的建築様式を尊重し、浴室とトイレを新しく作る以外に農村の景色や生活様式を配慮しながら修繕を行っている。

暑い日も寒い日もいとわずに、愛の避難所（すべての災難から避難できる温かい我が家）を、困っている人に与えたいと力を注いでいる光景は、この世で最も美しいものである。

【特別報道】

◎文・蔡佳珊／訳・済運／撮影・劉子正

## グリーンレストランが出現した 地球を食いつぶすな！



グリーンレストランは環境に優しい消費行動に火をつけた。

産地と消費者の距離を縮め、環境に優しいネットワークを築き上げた。

食材のシンプルな本来の味を引き出すためには、調理方法もより簡単に緻密でなければならぬ。

料理の質も天気に左右されて変わりやすく、無農薬食材はコストが高いため、シェフの腕前と理念が試される。







ア

レルギー体質の子供を持つ母親でもある大学教授の許儷絹はほとんど毎日、家で料理する。彼女の子供は化学添加物や質悪い油の混じったものを食べるとすぐに下痢をする。近くの路地裏で流行っているラーメン屋から有名なレストランチェーンまで、たくさんの店が彼女のブラックリストに載っている。

料理が好きな彼女でも、数学の研究で時間がなかったり、気分転換のために「安心して食事できる店を探す」のはとても大切なことである。結局、子供の胃腸に適しているレストランはわずか数軒しかなかった。しかし、それらは偶然にも一

つの共通点を持っていた。有機栽培や農業適正規準に沿った食材を使用し、過度に調理せず、人工添加物を使用していないという点である。これら「グリーンレストラン」の存在は彼女を安心させた。

作家の番紅花はある時、重い流感にかかった。料理をする体力もなく、子供たちに数日間続けて油と塩分の多い外食をしてもらった。彼女は「ママにも料理が作れなかったり、作りたくない時や時間がない時もある」と溜め息をもらした。会社を辞めて、主婦と作家を兼業しているこの女性は、料理できない時、外食も安心できないという矛盾した状況をよく理

解している。

「本来の味厨房」は番紅花を商品開発シエフとして迎え入れ、安心してテイクアウトできる家庭用惣菜の開発を依頼した時、彼女は喜んでそれを引き受けた。彼女は栄養を損なわず、簡単な調理法を用いることを前提にメニューを作った。小家族が二、三種類のおかずを選んで持ち帰り、家で野菜を炒めるだけで晩ご飯が楽しめるのである。彼女はこの機会に、親が料理するプレッシャーから解放され、子

●シェフの蔡侑承は台中摩天嶺に提携先の黄昭智の農園を訪れ、野菜や果物の栽培から収穫までの過程を詳しく聞き、食材への理解を深めている。

供の勉強に付き添う時間が増えることを期待した。

グリーンレストランで出す弁当と一般の弁当の最も大きな違いは、箱の上に小さな紙が貼ってあり、食材の産地を明記していることである。いつも自分で農園まで足を運ぶ責任者の鍾坤志は、「できるだけ環境に優しい農作物を使うことで、より多くの農家がこの方向に進んでくれることを望んでいるのです。お客さんが私たちの弁当を食べることが間接的に農地を保護することになるのです」と話す。

者が永続的に環境保全の方向に向かうように指導し、認証制度を押し進めてきた。創設者であるマイケル・オシユマンは二〇一一年に台湾で講演した時、次のように語った。もし、台湾の業者が食材の選別と調理方法において環境に優しく、エコと資源のリサイクルなどの原則の下に、できる限り新鮮な有機食材を使用すれば、アジア地域でリーダーになることができるだろうと。

日本も地元食材認証は早くから制度化されており、食糧自給率の向上と鮮度の高い食材を届けることを目標に、地元食材を支持する業者に認証を与えている。

## グリーンレストランが 大きな流れとなった

近年食の安全に関する問題が起きてから、グリーンレストランが台湾の至る所にできた。より多くのシェフやレストラン経営者が理念を実践する場所として、レストランで安心して食べられると同時に、もっと多くの消費者に社会と環境に関心を持ってもらい、食で世界を変えよう、と呼びかけている。

グリーンレストランの発想は一九九〇年に起こり、アメリカで「グリーンレストラン協会」(GRA)が設立された。業

その後、民間のレストランも自主的に「グリーンランタン」運動を起こし、店の前にグリーンランタンの旗を掲げると同時に、星の数で地元食材の使用比率を表すようにしている。

台湾はこの方面で遅れをとってきたが、近年の食の安全問題でグリーン飲食への志向が短期間で高まりを見せている。これに参画する店は雨後の筍のように現れ、政府の認証もそれに伴って進められた。例えば、農委会が推進した産地と販売業者による「産地追跡制度を紹介するレストラン」や国産の有機食材を使用する「有機思考、美味しいレストラン」



●好糧食堂自家製のピーナッツ豆腐と旬の野菜は新鮮さが最高の調味料であることを証明している。

や高雄市のような地方自治体の「環境に優しいレストラン」などがある。食卓のグリーン消費に伴って、健康に注意する一方、環境に優しい農業と環境保護を見守っている。

経済部（財務省に相当する）の統計に

よると、全国飲食業の売り上げはこの十五年間伸びてきており、二〇一五年は四千二百四十一億元（一元は約三円）に達した。しかし、華やかな業態の陰に、膨大な食材の浪費と資源の消耗が隠されている。もし、グリーン飲食が流行れば、環境にとって大きな助けとなるだろう。

## 環境に優しいレストランは消費者と農業の双方に有益

台湾ではグリーンレストランの先駆者はチェーン店ではなく、突然街角に現れる小さな店である。

宜蘭大学有機産業発展センターの黄璋如主任は有機思考の認証責任者で、あるホテルと有機農園の間を取り持ったが、「シェフもオーナーも同意したのに、仕入れ係が同意しなかった」経緯がある。ホテルに野菜を届けた農民が仕入れ係に見栄えが悪いと言われ、合作が成立しなかったことがある。

また、有機野菜を使うと謳ったチェーン店が価格が高いために客の入りが少なく、結局閉店してしまったところもある。黄璋如の観察によると、大きいレストランが業態を変えるのは容易ではないが、逆に理念が成熟した小さい店は環境に優

しい農業の長所と短所を理解しようと努力し、それを忍耐強く客に伝え、堅実さが累積されて信頼の基礎ができ、固定客ができるようになる。

静かな路地にある「禾豐田食」は二人の若い女性が始めた小さな店である。歳月の流れが感じられる古い建物の中へ入ると、まず蜜の香りがする竜眼花茶が客の心を捕らえ、続いて定食が出される。見たところ簡単な料理だが、豊かな味が隠されている。野菜や果物はよく知った小規模農家から取り寄せ、肉類には産地からの販売ルート証明がつけられている。そして、加工食品である味噌や豆そぼろは



有機大豆を使った自家製である。

シェフの蔡佑宸は休みの日には自ら頻繁に産地の農家を訪ねたことで、進むべき道が大きく変わった。「以前学んだ飲食に関する知識が覆されました。改めて土地と食べ物を理解し、食材の本来の味をどう活かすか挑戦しようと思うようになりました」と言う。アレルギー体質の彼女は、舌でわずかな違いも見つけ出すことができ、有機肥料を使い過ぎた野菜もすぐに判別できる。それで、優先的に自然農法を使うようになった。

提携先農家の黄昭智は、このような安定した需給関係は農家にとっても大いに

助かると言った。同じ台中に住む彼は毎週自ら収穫した新鮮な野菜や果物を店に届けている。彼が栽培した農作物は肥料も農薬も使わず、見栄えはよくないかもしれないが、味は格別に濃く、歯応えもしっかりしている。デザートシェフの宋苑柔は彼が栽培したモンキーバナナを使って柔らかくてしっとりした香りのある米粉ケーキを作った。桑の実ジャムを泡立てた冷たいジュースはこの店の売れ筋商品である。

シェフの器用な手で食材の特色はめいっぱい発揮され、農民の苦労も客に理解してもらえるようになった。禾豊田食は

不定期に農家によるマーケットと食農に関する講座を設けて生産者と消費者の橋渡しをしている。

グリーンレストランの出現は都会だけでなく、地方でも増えている。「好糧食堂」のオーナーの葉品好は三年前に山と海に隣接した宜蘭県南澳郷に移住して来た。遊び半分で農業をしていた彼女は「南澳には新鮮な食材はあるが、地元の作物を主体に特色を出したレストランが一軒もない」ことに気づいた。彼女はすぐさ

●白羊道に弟子入りの劉政璋は薪焼き餅を作るために、餅米を擦ってから水気を切り、それを蒸籠に入れて蒸す。



●宜蘭南澳のシェフ葉品好は農民でもあり、レストランで使用する食材の多くは自分で栽培したものである。

ま、農耕の合間に小さなレストランを始めた。

好糧食堂の食材はほとんどが数キロ以内で取れたもので、彼女自身が栽培した野菜や果物、ハーブも含めて、産地からレストランまで距離が最も短い例と言える。かつて環境保全団体に所属していた彼女は、産地に近いことは有機栽培よりも重要なことだと思っている。「私自身以前、有機野菜を注文して一箱送ってもらったことがあるのですが、十種類の野菜



と感じた。

### 安心して食事できることは基本的 人権

グリーンレストラン経営者のこれほどのこだわりを客は分かってくれるだろうか？ 厳選された食材による料理はまず濃い味付けに慣れた外食族による試練を受ける。

「食在地台湾素」のオーナー林朗秋は、百以上の農家と加工工場を訪れて提携先を探したことがある。醤油の選択だけでも二十軒以上回って、やっと自分の理想

に十個のビニール袋を使っている上、輸送でもCO2が排出されます」と言う。その結果、彼女は近くの住民が栽培した野菜や果物を買う方がよほいいと思った。例えば、あるおばさんが病氣してから自分で栽培したものを食べるようになったが、そういうものは農薬を使用するはずがないのである。

葉品好は同じ考え方の仲間を集めるために、台湾全土の二十数軒のグリーンレストランを訪ねて回ったことがある。そういう飲食は体に良いだけでなく、土地と人の関係にまつわる面白い話と共に、人の頭脳と心に潤いをもたらしてくれる





●台北原味厨房は弁当箱の上にQRコードのシールを貼り、ホームページで使用している食材の産地を公開している。また、料理もバランスの取れた健康的なものを前提にしている。

に合った仕入れ先のリストを作り上げた。彼は苦勞して選んだ物を過度に調理して本来の味を損なった挙げ句、客に味気ないと言われたくはない。

林朗秋はかつて健康食品会社の幹部だったが、長年の経験に基づいて、食習慣を変えるのが健康維持の第一歩であることに気づいた。彼の素食レストランに入ると、壁に大きな台湾地図が描かれており、様々な食材の産地と提供している農民の写真が貼られてある。そして、テーブルの上に立てられているのはメニューではなく、使用している野菜の履歴が分かるQRコードの紹介である。客がスマート

フォンホをかざせば、生産段階からの背景が一目で分かるようになっていた。

素食レストランは逆に加工食品を一切使わず、小麦粉も怪しいので麺類も出さない。また、野菜は有機栽培や自然栽培のものだけを使い、各方面でこだわった挙げ句、定食の値段は百三十元に抑えている。グリーンレストランでよく聞く問題は食材コストが高いため、販売価格を低く設定できないことである。林朗秋は包み隠さず、安く有機食の店を経営する秘訣を語ってくれた。中間業者を通さず、少数の決まった農家から安定供給を維持し、メニューは固定させないことである。

## グリーン食の履歴 皆で検証する

●高雄 YAYA グリーン厨房のオーナー張維真は微風有機市場と提携し、直接農家から購入し、食材の安全と新鮮度を確保している（左）。政府はグリーンレストランのバッジと有機野菜のQRコードの普及を進めており、消費者にとって一層の保証となっている。





「農場から送られてくるものは何でも受け入れます」。絶対に「有機」を「高嶺の花」の存在にしてはならないと彼は思っている。

厳選された食材にもかかわらず、値段が安いのは高雄の「Yaya グリーン厨房」も同じである。このレストランは真っ先に自然に優しいレストランの認証を受けており、評判は非常に良く、よく流行っている。オーナーの張維真は痩せ型の肉食を好む台南出身の女性である。「食事することは人としての権利です！」と彼女は強い語気で語った。

以前忙しい金融関係の仕事に従事して

いた彼女は、毎日外食ばかりで、母親の手料理を懐かしく思っていた。店を出してからメニューは家庭料理風に徹した。しかし、食材を研究していくにつれ、容易でないことが分かった。彼女が使う野菜や果物の九〇％以上は有機自然農法で栽培されたもので、高雄地元の微風市場または信頼できる農場からのものばかりである。油炒めして味を添えるだけのニンニクでさえ産地を厳選している。

張維真は「有機イコール高い」という先入観を崩そうと果敢に挑戦している。コスト管理ができていれば、仕入れる量を細かく計算して無駄を省ける。「要は浪費

を減らすことです」と財務管理に長けた彼女が説明した。

## 太陽光発電で電気代ゼロ

源に遡って減らすことと使わないことがグリーンレストランの原則の一つである。自然に優しいレストランを推進する高雄餐旅大学飲食管理学部の劉秀慧副教授が査定方法を説明してくれた。六つの角度から査定するのだという。省エネ、環境保全、有機で安心できる飲食、環境に配慮した仕入れ、永続的経営、衛生面での安全などである。また、大学ではグリ

ーン料理技術関係の授業も行われ、地元食材、環境に優しい調理法、添加物を使用しない本来の味など従来の飲食と異なる新しい観念を教えている。

書籍と料理を提供している「二冊書店」の経営者である郭美如は次のように言った。グリーンレストランの重点は食材の産地を強調するだけでなく、各方面から環境保全精神も強調すべきである。例えば、ごみの減少やエネルギーの節約もレストランのグリーン度に関係してくる。彼女の店では使い捨てのテイクアウト用弁当箱は一切使わず、代わりに容器を貸し出している。また、トイレでは手拭き



●（上）白羊道のオーナー陳婉玲は環境保全を徹底実践している。店で使用しているドリンクの瓶は全て朝食専門店からリサイクルした牛乳瓶で、定年退職した女性を雇って洗浄した後、日光で消毒している。

●（下）レインボーレストランのオーナー洪輝洋は店の前に生態水路を造って外の熱を遮断すると同時に水中生物の生息する場になっている。



ペーパーの代わりに清潔なミニタオルを用意している。

エネルギーは節約できるだけでなく、作り出すこともできる。夏の屏東は灼熱の太陽が照りつけるため、レインボーレストランのオーナー、洪輝祥は「自由の屋根」と名付けた太陽光発電から毎日、どれだけ発電されているかを計算している。今年の六月末現在、一日で最高九十度の発電を記録した。それは九軒の家庭が一日に使う電気に相当し、レストランが七日から八日間使うのに十分な量である。

エネルギーが思うままになるので、「自

由」なのである。屋根いっぱいには太陽光発電パネルが敷き詰められたレインボーレストランは最も電気を使う夏を発電のピークに変えてしまった。

洪輝祥は屏東県環境保全連盟の理事長であるが、朝から晩まで省エネを唱えているよりも自ら実践して見せた方が早いと思った。そして、仲間と共に廃校となった台糖幼稚園を「レインボー広場」に変えてしまった。ここではリサイクル、リユース、リデュース、リカバリーという環境保護の原則である4Rを実践している。

永續が必要なのはエネルギーだけでな



く生態系も同じである。水が流れる店の表の水路は建物の中の温度を下げると共に多様な生物を育み、手ですくうことができるほどたくさんの小海老が育っている。レストランの横には水槽が設置されており、回収された雨水と野菜洗いに使った水は敷地内の草木に撒かれる。

食材は輸入品を一切使わず、パスタでさえも国内産小麦粉を使った自家製である。ほとんどの農産物は「緑農の家」が

契約している百軒を超える農家から仕入れている。「レストランを経営する目的の一つは、農家が売れない農産物を消費することなのです」と洪輝祥が言った。それによって採れ過ぎたり見栄えが悪くて売れない問題を解決している。

### 地元食材を使うのは世界的な傾向

地元の食材を使うのは環境に優しいだけでなく、美味しさが格段に違う。北投の「十米屋」のデザートシェフ蘇怡帆は洋食の手法で地元果物の魅力を

引き出している。ガラスケースに入っているデザートは外観は地味だが、口の中に入ると美味しさが広がる。

「私はできあがったレシピに基づいて最適の果物を探しに行くわけではなく、送られてきた果物を食べてその農家と知り合い、その人と農産物に興味湧いた時、それ

●北投の「拾米屋」のデザートシェフ蘇怡帆（右）とパートナーは真面目に果物の品質をチェックし、ジャムを作る。





をデザートで表現することを考えるのです」。陽明山の原種みかんや露の滴る有機イチゴ、ほとんど忘れ去られてしまった酸っぱい台湾楊桃などに出会い、蘇怡帆はとても感動した。シフォンケーキかパウンドケーキ、フルーツタルト、それともパイが最適か、と彼女はそれぞれの味を極限まで表現しようと思いを巡らせる。

いつもたくさん試作して初めて完璧に表現できるものを見つけ出す。季節の果物は変化が大きく、製品にするには難度が高い。たとえば、春のパイナップルは香りがとくに強いので、故意に人工的な味を抑えてその香りを引き出す。雨季の

イチゴは薄味なので、ナツメグを使って独特な風味のイチゴタルトに仕上げていく。

ふつうデザートシェフがフルーツジャムを使って品質と味を安定させ、それを標準化しているのに対し、蘇怡帆は果物に合わせてオーダーメイドのように作るため、苦労ばかりが伴う。果物を使用できるようにするだけでも膨大な時間がかかる上、ロスも考慮しなければならない。イーストや香料エッセンスなどの添加物を使わないので、製造過程は一大試練である。しかし、それだからこそ、デザートシェフは厨房を飛び出して大自然を理

解し、斬新な思考ができるようになるのだと蘇怡帆は思っている。

### 将来を担うシェフを募る

中華にしる洋食にしる、また、最高級レストランでも屋台でも、料理する人は皆、環境に優しくする社会的責任を担っている。これについて、「環島爆米香」の

●健康的な飲食が社会を風靡し、レストランの装飾にも反映されている。レストランも食農教育の場であり、子供に食べ物の原型を理解してもらおうと同時に健康を訴えている。それは食の安全問題で過度な恐怖心を抑えるのにも役立っている。

青年オーナー頼咏華は何の躊躇もなく行動に移す。

彼は以前、台湾で数人しか残っていない大先輩に土臼で米を挽く方法を学び、途絶えかけている技巧を伝承しようとした。また、自分で田植えして米農家にもなった。その後、中古のポップコーン製造機を買って軽トラックに乗せ、台湾各地の環境に優しい方法で生産している米農家を訪ね回り、それを使用してポップコーンを作っていた。

「今の若い人は衣食住が外来文化に同化され、世界の他の国の人と変わりがなくなってしまう。そうでは、台湾

人として何が歴史に残るのでしょうか?」。米づくりから臼で挽いてポップコーンにする過程で、頼咏華は一般の人に最も身近な米を通して文化に対する自覚をしつかり啓発できることを期待している。

恒春旧市街にある老舗の「白羊道」薪焼き餅店のオーナー陳婉玲は、小さな餅に彼女の地球を愛して止まない心を詰め込んでいる。餅の原料は餅米、粟、ピーナッツ、小豆、胡麻などだが、全て長い間信頼して付き合ってきた有機農家が生産したものである。そして、エネルギー効率が最も高いロケットストーブで餅を蒸す。燃料の薪は材木屋で出る木の切れ

端である。二千元分の薪で三、四カ月は使えます」。ガス代の十分の一でできた餅は格別に美味しいのだ。

二〇一一年、世界各国の有名シェフがペルーで共同宣言をまとめた。リマ宣言である。冒頭で、「料理は変革をもたらす強力な道具であり、シェフであれ生産者、消費者であれ、皆で協力すれば世界を変え、健康的な食生活をもたらすことができる」と謳っている。

「未来のシェフが積極的に社会に参加し、意義と責任を持って公正かつ永続的に社会に貢献できることを信じている」。宣言の中で、シェフが文化の橋渡し役に

なり、人類と地球の関係を修復し、専門家として大切な知識と価値観を提供できることに期待を込めている。

厨房で理想と現実の狭間で汗を流しているグリーンレストランの経営は容易ではない。このように難しいことは分かっていてもかたくなに進む人たちが地球を愛する究極の料理を人々に出している。そういう料理はただ口に入れるだけでなく、考えながら、心して行動で以て味わうべきものののだ。

(経典雑誌217期より)



## あの百日間

◎文・ニルテス・シヤカ／訳・慈願

強烈な地震がネパールを襲ってから百日が過ぎた。

今もなお多くの人が救援を待っている。

私は慈済人と共に至る所で同胞を助けていた。

百日が過ぎ、私は果たすべき任務は終わったと思っていた。

しかしそれは間違いで、さらなる任務のはじまりだった……。

●ネパールのニルテス医師（真ん中）は2015年、玉里慈済病院の張玉麒麟院長（左）と患者を治療した後、優しくマフラーをお年寄りの首に巻いてあげている。

一一〇一五年の四月二十五日は土曜日  
一一で、午前の診察を終えた私は、自宅へ戻って一休みするため診療所を出ました。のどかなそよ風とみずみずしい花の香りの中を人や車やバイクが行き来し

て、お年寄りたちは商店の前に座って暖かな陽を浴び、主婦は夫や子供が昼食に帰って来るのを待つ、平和な日常風景が広がっていました。

私はベッドに横たわって、父が尽力している釈迦基金会の設立について考えていました。これは「釈迦族」命名の基金会で、私は大変興味がありました。が、明確な考えが浮かんできません。ある時、父

と意見を交換した時、「釈迦」という二字は、釈迦牟尼仏を由来としているから、私たちが立てる方案としては、仏陀の精神と結合させねばならないということでした。

私は仏陀の彫像や絵の中にこめられている意義を探そうと試みましたが、あらゆる仏はたんなる彫像ではなく、一種の偉大なエネルギーがこめられているように思えました。

こんなことを考えていた時、ふいに私のベッドは小舟のように揺れて、飾っていた小象の置物や仏像が箱から飛び出し、左側の屏風は倒れ、壁にある写真の入



った額は左右に揺れ動き出しました。次いで爆竹のような音と人々の叫び声が響き、一瞬夢かと思いましたが、すぐに地震だと気づきました。

「大地震だ！ 早く家の前の道路に逃げろ」と父は一人ひとり家族の名を呼びながら叫びました。道路は人の群れで溢れかえり、バイクは人もろとも道端で横倒しになっていました。電線には火花が走り、崩壊した家屋に、人は避ける暇もなく押し潰されていました。絶えず揺れる余震の恐ろしさに混乱は極限に達していました。

白昼にもかかわらず、人々は暗闇の中

隙間のないほど人がいっぱい、診療所の中にはおびえたお年寄りや子供たちがいました。

私は患者を治療するかたわら、仏のことを話しながら人々の心を落ち着かせていました。人々の心を落ち着かせることは容易でも、自分の心をコントロールするのは簡単ではありませんでした。医師であり釈迦族の末裔である平凡な私は、自分の心をコントロールし、何とかして皆とこの難関を乗り越えなければならないと思いました。

この災難が引き起こしたむごい被害は、戦争にも劣りません。ネパール政府

にいるような感じで、駆けつけてきた救援部隊はシャベルを使って生還者を探していました。子供たちは泣き叫び、人々は無言のまま天を仰いで茫然自失となっていました。医師の私も、どこから手をつければよいのか、なすすべもありませんでした。

**人を助けるのは困難だが  
心に安らぎを与えるのは  
さらに難しい**

翌日の早朝、私はいつものように勤務先の診療所に行くと、その前の空き地は

は緊急状態を宣言して、素早く部隊を救済に派遣し、国連や赤十字社やNGOも続々とネパールに到着しました。彼らは先進的な設備とよく訓練された人力を有し、それぞれの制服を着て、ネパール軍の支持どおりに後続支援を提供していました。

赤いランプを灯してけたたましく走り回る救急車。瓦礫の周りで泣きながら「私の家族を助けて」と懸命に救援を求めている人々。悲惨に包まれているネパールのため、世界の人々は遭難者を弔い、その家族たちの幸せを祈ってくれていました。

しかし、この困難な時に大地の母は民をいたわってはいくれず、大雨の中で金持ちも貧困者も関係なく一様に、地上で寒さを忍んでいました。すべての食料は我先にと買いあさられ、貧富の別なく誰もが飢えに苦しんでいました。数日後、ようやく政府機関とNGOが食糧や薬品、テントなどの物資を配付していました。

どの宗教にも大師がいますが、その何人も大自然がもたらす崩壊を阻止することができません。ただし仏陀のお教えを通して、「愛」とはすべての難雑を解決する唯一の答えであり、またその堅実な力は百万人以上の人をも助けることがで

き、それが信仰だと体得しました。

地震の発生は私たちが「天地を敬わなかった」結果でしょうか？ 過去に民族や階級、地位といった大義名分のもとに戦争を引き起こした人たちは、この災難に対して人を助ける心があるだろうか？ 人類の心の奥底に慈悲の心はあるのだろうか？と考えさせられました。

こんな考えをしていたことに自分でも驚きましたが、この災難によって人々は団結して、手に手を取って地震の悲しみから立ち直ったのは事実でした。

## 二つのテーブルと二脚の椅子で足りますか？

父はネパールの科学技術部長を務めていたケシュバ・マン・シヤカです。「台湾から慈済医療団がくることになっているが、参加しないか？」と私に言いましたが、自分の診療所でも忙しいのにと氣にかけていませんでした。

震災後、私の歩いた所々で見たもの、聞くものはみな悲惨なことばかりでした。幸いにして生きのびた被災者をどうやって助ければよいのかと思うと、自分の無力さを痛感しました。困難や煩惱に遭っ

た時、釈迦牟尼仏ならどうなされたか？と思索していましたが、今はまず慈済を理解しようと心に決めました。

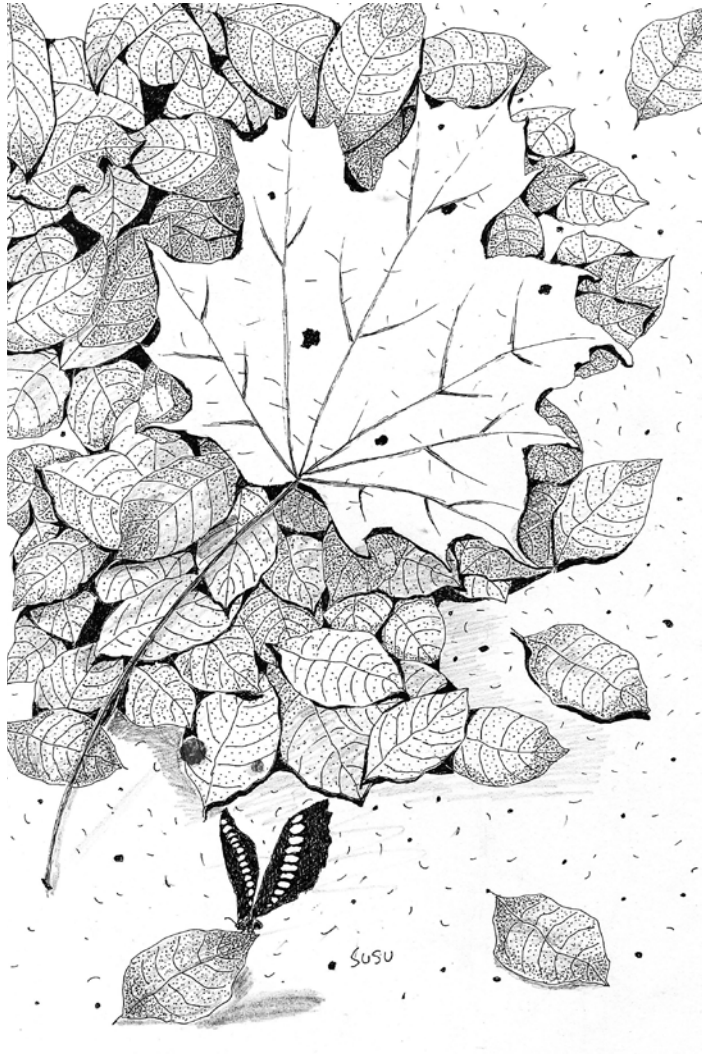
それでも疑問を抱いたまま、慈済基金會の人医会（慈済の医療ボランティアチーム）代表の趙有誠医師と簡守信医師にお会いすることになりました。人医会ボランティアの乗っていた航空機がネパールの空港に到着する時、空中で二時間余り旋回していたので、災難の混乱状態を理解していました。後にお二人は、航空機が着陸した時もネパールへの入国許可は下りるだろうか、と自信がありませんでしたと、おっしゃっていました。

重ね重ねの困難を経て、慈済人医会のボランティアはやっとネパールの土を踏み込むことができ、父の紹介で政府の役人に会って医療許可証を貰うと、すぐに救助活動を開始しました。また、父の紹介した地元の医師たちと会議を開いた後、休むまもなく実地調査に出かけて行きました。彼らはマタプ病院を拠点に、負傷者の折れた骨をポータブル撮影機で撮影してネットで台湾に送り、第二次医療団がくる時に必要とする器材を持つてくる手筈を整えていました。

その時まで私は、趙有誠医師と簡守信医師が台湾の慈済病院の院長だと知りま

せんでした。翌日、医療救助計画を立てている時、彼らは私に対して丁寧に、「ありがとう。あなたが手伝いにきてくれて本当に感謝しています」と言いました。彼らが大病院の院長と知ってから、私に多くの期待をかけているのではないかと心配で、一緒に行動してもよいものかとためらっていました。

すべての薬品と器材を車に積み込むと、趙院長は「さあ私たちを施療できる所へ案内して下さい」と言いました。私は「あなたたちは本気ですか？被災者の施療をするなんて冗談でしょう？」と我慢できなくなって笑い出すと、簡院長





は「治療を必要としている所ならどこでもかまいません」と答えたではありませんか。

その時、私は、この二人が自分が思っていたような近寄りがたい人ではなく、ただ一心に被災者を助けようとする単純な心を持った方たちだと理解することができました。長旅の疲れも見せずに、一分一秒を惜しんで心にあるのは、ひたすら被災者に尽くそうとする人たちだと。

私は慈済医療団を、カトマンズから車で十五分離れた古城にあるバプ眼科センターに案内することにしました。震災後、臨時健康ケアセンターに設置された

テントに案内すると、眼科だけでなくすべての患者を受け入れていました。

私はラム・サンダー・ラシワ院長に空いた所を治療に借用してもよろしいかとお聞きすると、院長は快く承諾して二つのテーブルと二脚の椅子を提供してくれました。私は心の中で、台湾からはるるこれ、しかも二人とも大病院の院長なのに、たった二つのテーブルと二脚の椅子でいいのかと思っていました。

私は「これで足りえますか？」と聞くと、二人とも笑って「充分です」と。治療は順調に進行していましたが、治療の時は患者とはあまり意志が通じないので、私

は数人の英語を話せる地元の人を探して通訳に当たらせ、自分もその間で補っていました。

言葉の通じない時は通訳をして、新しい治療の地点を探す時はガイドになり、手術で手の足りない時は助手を務めて、初日の治療では百十一人の患者を診ました。私は患者たちから無量の幸福感という見返りを受け、またお二人からは多くのことを学ぶことができました。そして人が必要とする時、両手を差し出すのは楽しいことだと知りました。

その日私は満足感を抱いて帰りました。お腹は空いていましたが、心にはい

っぱいの満足感が入ったような感じでした。体は疲れていても心は充実し、明日になるのを待ちかねていました。

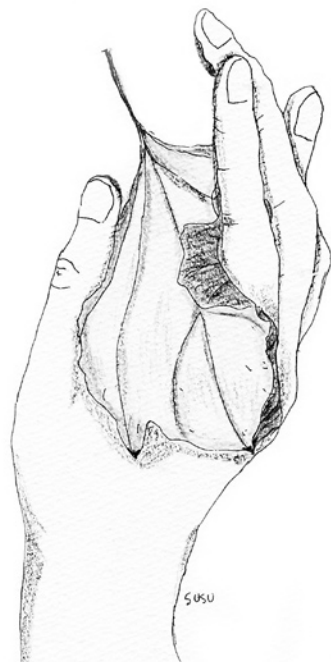
### 一日中奔走していても 心は満ち足りていた

慈済は一部の人をセンターに残して、一部を転々と移動しながら治療をする機動型診療法をとっていました。私たちは移動する度に、地元の医師と看護師やボランティアを募って治療の参加を勧めていました。この慈悲深い効率のよい方法によって、続々と百名以上の人が協力

して両方の機動型治療チームの作業は成功を収めていました。

私たちは毎日移動しながら治療を行っているので、忙しい時は食事を取るのも忘れていました。不思議はことに、慈済の人たちと治療を行っているとお腹は空かず、喉の渇きも疲れも感じません。

慈済のボランティアたちは、インスタントのご飯と飲料水を用意していましたが、いつも先に地元ボランティアにあげて、皆が食べ終わってから自分たちが食



べていました。食料の足りない時は地元ボランティアにあげて自分たちは空腹を忍んでいました。

ある日、パタプ機動治療中のランチタイムが過ぎた頃、マレーシアから来てい

た人医会の李曉卿医師に、「お腹は空きま

せんか？ 昼ごはんが済んだら別の地点に移りましょうか」と聞きました。彼女は反対に私に「お腹が空いたの？」と聞くので私は「そんなに空いていませんが」と答えました。すると彼女は、「あなたのお腹が空いていないのに、どうして私のお腹が空くの」と言うのです。彼女はこのユーモアたっぷりの返事を繰り返すのでした。

慈済医療団の皆さんは、自分の食事よりも患者のことを先に考慮します。その日私は、慈悲の心があれば、たとえ胃が空になってもひもじいとは感じないとい

うことを実感しました。

簡院長と趙院長は昼食を取られただろうか？ 私が見たのはただ一心に患者を診ている姿だけで、驚いたのは、仕事が終わってホテルへ帰る途中、車の中で、やっと弁当箱を取り出して食べていたことです。

慈済人は雨天や照りつく太陽でもお構いなし、空腹であろうが喉が渴いても人を助けることを第一に考え、大雨でも休みません。こんな慈済人を見て、数百名の現地ボランティアは不思議に思いつつ、自分たちも怠けるわけにはいきません。

地震がネパールを襲ってから百日を過

ぎても、ネパールの人々は支援を待ち望んでいます。私は慈済人がネパールに入った時から百日間、彼らについて町から町へ、村から村へと休む時なくついて回りました。

この日私は慈済のテレビ会議に参加しました。證嚴上人が私が慈済に協力したことを述べられておられました。その時、證嚴上人がおっしゃられた私は自分ではない他人のような気がしましたが、確かに感謝されたのは私でした。

私は自分の生活様式を一変させて、慈済の人たちと共に至る所で同胞のために駆け回っていたこの百日間で、自分の任

務は終わったと思っていました。しかし、それは間違いでさらなるはじまりでした。

慈済の人たちに心の奥底から触発されて、参加すべきか否かと複雑な思いでしたが、再度自分を見つめ直しました。そして、私は元々この団体の者だったのだ、これからは一生慈済のために尽くそうと覚悟を決めたのでした。

\*

街頭を車が騒々しく行き来し、診療所は震災前に戻って忙しくなっていました

の組織とも提携して、慈善、医療、教育の活動を行います。

慈悲の清流は人々の心にあります。心霊を奮い立たせて連結した愛が、仏陀の故郷でたくましく成長することを願っています。

組織と連携したり協力し合うことは、私にとって最大の挑戦です。

私には学ぶべき所がまだ多くありますが、私が学んできた経験をボランティアたちに伝えていくことが、ネパール人医会の一員としての任務であると思っています。時は飛ぶように過ぎ去っても、ネパールの慈済はしっかりと根を下ろし、他



慈濟道侶の本

慈悲の火を灯し続けて仏の国へ  
慈済人医会は行脚する



## 慈善修繕・弱者の家をリフォーム

日本の有名な娯楽番組「大改造! 劇的ビフォーアフター」は建築士が古い家を家主の理想に沿った家に改造するものである。

台湾では慈済ボランティアが弱者家庭の家を修繕している。

その家は以前、夜中に雨音がすると、雨漏りしない場所に移動していたが、今は安心して眠ることができる。

このことが恥ずかしくて、子供は友達を家に呼ばなかったが、今は何の心配もなく、友達を家に招いている。

慈善の修繕によって、かつて帰りたくなかった「家」が帰りたい場所となった。







● 雲林県褒忠郷のお年寄りは長年、板とブリキでできた粗末な小屋に住んでいたが、メディアに取り上げられたことで多くの人が関心を寄せた。慈済は案件の報告を得て査定した後、その古い住まいを修繕することを決定した。



慈<sup>ツ</sup>濟<sup>ジ</sup>の専任建築士である陳文亮は朝早く台中県の家を出て、車で隣の彰化県二林に向かった。この日は呉さんの古い家を修繕するために、数人の作業員と共に、土台にセメントを流し込む作業を行った。

四十年以上の歴史をもつ竹組みの家屋は、屋根の骨組みが虫に喰われて雨漏りしていた。家にはトイレもなく、電気の配線はむき出しになったままで、人が住めるような状態ではなかった。呉さんは

●陳文亮は弱者家庭のために至る所で家屋の修繕を行っている。彰化に行ったついでに案件の家を訪れ、リフォームした後の台所の使い勝手を見に行った。

普段、地下水を汲み上げて体を洗い、冬の間は屋外で湯を沸かし、それを屋内に運んでから使っていた。台中で働いている娘が戻ってきて泊まる部屋がない。

六十を過ぎている呉さんは、農作業をしながら癲癇持ちの妻の世話をしている。妻は毎月三千五百元の障害者手当をもらっているが、呉さんは時間があると仕事に行き、家計の足しにしている。

その日の午前中、怪物のように巨大な生コン車が狭い村の路地に停まっていた。陳文亮は慈済ボランティアが来るのを待って、作業を始めた。狭い空間を皆は猫車で休む間もなく往復し、やっと土

台にセメントを流し終えた。隣人は呉さんの訪問ケアに度々訪れる慈済ボランティアと顔見知りになっていたので、数時間の不便を快く了承してくれた。

日が昇る前に仕事に出かけていた呉さんが帰宅すると、作業の仲間入りをし、家の修繕に力を尽くした。

翌日、陳文亮は再び早起きして、真新しい給湯器とガスコンロをおんぼろ車に乗せて雲林県虎尾の邱さんの家に向かった。数十人のボランティアがもう邱さんの家の前に集まっていた。雨が降ると必ず雨漏りしていた古い家の屋根瓦を取り替えるためである。作業効率を上げるた





め、リレー方式で一枚ずつ取り外した。

邱さんの家は六十年の歴史を持つ台湾の伝統家屋、三合院式の家のかたわらにある薪小屋で、屋根に穴が開いているだけでなく、梁も柱も変形し、屋内のセメント敷きにも亀裂が入っていた。屋内には浴室もトイレもなく、子供たちが休日に帰ってきても泊まる部屋がない。人伝に邱さん一家の窮状を聞いた慈済ボランティアと社会福祉課の職員が調査訪問し、浴室、トイレ、台所を設置することが決まった。そして、薪小屋を改修して子供たちが泊まれる部屋にした。

家屋の修繕は、お金を用意して専門の

人にやってもらえばどうということはないと思うかもしれない。しかし、ともすると数万円（一元は約三円）から数十万円かかる費用は、経済的能力がなかったり社会福祉資源に頼って生活している人にとつては、天文学的な数字に聞こえる。慈済慈善志業の中には修繕という項目がある。自分の家を修理する経済的能力のない弱者家庭の場合、ボランティアが状況を見て社会福祉課と建築関係者と一緒に現場を視察し評価を行い、修繕支援を行うかどうか決定する。修繕する時も慈済ボランティアが作業員として働き、出費を抑えることができる。

## 倒壊危険のある家屋をくまなくチェック

陳文亮は慈済基金会營建処の専属建築士の一人で、ボランティアが弱者家庭のための家屋修繕の見積もりを出す際に、専門家として助言を行っている。この三、四年の間だけで彼は百軒以上の住宅の安全性やリフォームなどに関わってきた。

「浄化槽だけでも昨年一年間に数十個建設しました」。台湾では貧富の差が大きいとは言っても、陳文亮はまだこれほど多くの人が水洗トイレを使用していないことにびっくりした。家によっては近く

の廟でトイレを借りたり、屋外に穴を掘っただけのトイレで用を足していた。

陳文亮はよく雲林や彰化、苗栗など辺鄙な地方に出かけるが、時には往復で二、三百キロになることもある。二十五年乗ってきた彼のジープは走行距離が五十万キロ近くに達している。この数年来、弱者家庭のために奔走してきたが、ボランティアには彼が人間GPSのように見える。彼がいつも辺鄙な畦道や廟、水路、堤防、魚の養殖場などの間を抜けて素早く目的地に辿り着くからだ。「何回も間違えれば覚えられますよ」と陳文亮は笑って言う。

かつて台湾の多くの重要公共建設に関係し、数十億、数百億元もの大型建設に携わってきた陳文亮は、二、三十万円の予算で家屋を修繕する時も、同じように細心の注意を払って取り組んでいる。「節約できるところは節約し、壊すべきところは壊します」。慈済のリフォームは効果的に風雨を遮断したり予算を抑えるだけでなく、耐久性に優れた材料を使ったり、古い家に適した伝統的な修繕工法を用いるようにしている。

「弱者家庭もそれぞれ状況が異なるため、一件一件のリフォーム案で試されているようなものです」。陳文亮によると、

積もることは即ち、その家に「人間ドック」を受けさせているようなものである。真新しいものを建てるのは難しいことではない。図面通りに作ればいいからだ。「しかし、リフォームや修繕は問題箇所を見つけないけません。医者が患者の病気の原因を見つけ出すのと同じです」。陳文亮は、これまで多くの弱者家庭の家の雨漏り箇所を見つけ修繕してきた

●安心して住むために家屋の修繕をすることは重要なことだが、それ以上にボランティアは弱者家族の心身の健康と家族間の情に関心を寄せている。工事が終わっても引き続き訪問し、生活に必要な物資を提供したり、医療や教育支援を行っている。

各家庭は背景が違う。「家族構成は何人ですか？ 男性と女性の人数は？ お年寄りや子供はいますか？ 障害者はいますか？」。目標は家屋のリフォームだが、空間を使用するのは他ならぬ人間である。それだから彼は、「この家族はどうやってお湯を沸かしているのか？ 給湯器の設置場所は安全か？ 毎日使っているのか？ 風呂場とトイレはあるのか？ 電気の配線は老朽化していないか？」などの細かいこととくに注意を払う。

生活習慣は日常的な空間配置と安全性に関係してくる。慈済の専門チームとボランティアが案件の家をチェックして見



経験から、より熟練した建築経験が必要であると共に、臭くて汚い環境に耐えなければならぬと考えている。

## オーダーメイドの修繕は 心遣いが行き届いていて実用的

南投市で一人暮らしの陳乞食は今年七十八歳で、住居は八卦山脈の稜線上にある。百年近く経つ古い家は、至る所で腐蝕しており、破れて雨が降るとすぐに雨漏りする。二〇一五年、台風十三号と二十一号の二回の来襲で寝室の屋根が破損し、彼は居間に軍隊式の折り畳みベッ

ドを置いて寝るしかなかった。そのほか、多くの扉や窓、照明器具などは壊れたままで、電線はむき出しになり、給湯器は古くて使えない状態で、安全性と質に問題があった。

陳乞食の唯一の収入は月七千元の農民手当で、持病の薬の代金と生活に必要な経費を除くと、自分で家の修繕をする余裕はない。現地の慈済と町長の要請で、陳文亮とボランティアが視察し、その古い家を修繕することを決定した。

台風の後、彼は多少でも経済的支援をしてくれる慈善団体はないか聞いてみた。屋根から雨漏りさえしなければよい

と思っていたが、思いも寄らず、ある団体が全体的な修繕を引き受けてくれたのだ。

その家の裏半分の壁は「土塙厝」と呼ばれる今では貴重な伝統的な泥作りの壁で、専門家たちは「古跡を修復する」姿勢で臨んだ。壁の外側は硬質のペンキではなく、柔らかい石灰を塗り、木の窓枠は昔風にした。また、割れた屋根瓦は銀灰色の伝統的な瓦を模倣した物を使った。

普通、最も簡単な修繕方法は、屋根瓦を撤去してトタンを敷くのだが、保存する価値のある古い家や三合院はトタン屋根にするとちぐはぐになってしまう。時に

は全体的に景観との協調性を考慮して、木材で梁を作り、屋根は防水加工した後、取り払った元の瓦を敷き戻して、元来の伝統的な容貌を残すのだ。こういう方法は手間ひまはかかるが、専門家たちは価値のある仕事だと思う一方、居住者にとっても意義深いものだ。

陳乞食の古い家はできるだけ元の外観を残しているが、家の中には数多くの鉄骨で梁や柱にし、軽量の鉄骨で天井を作っている。「オーダーメイド」であると同時に、伝統と現代観を兼ね備えた修繕と言える。

それだけでなく、専門チームはお年寄



りが毎日、ガスで湧かしたお湯を浴室まで運んでいたことを知っており、今回は電線を余分に一本引き、浴室に電気給湯器をつけることで、格段に便利になるだろう。「あれほどの歳なのですから、思いやるべきです」このように一体的な修繕は十数万円の費用と一カ月以内の工期をかけて完成し、お年寄りの居住の質を改善した。

「慈済が修繕する時、考慮するのは一人で暮らすのに適しているかどうかです」。陳文亮はいつも日本のテレビ番組「大改造！劇的ビフォーアフター」のように、少ない経費で最大の修繕を行うことを目指

している。自分の専門分野で人の役に立てることを嬉しく思っている。

彼の同級生たちは豪邸や大規模な工事を請け負っているだろうが、彼は弱者の住居修繕に忙しい。しかし、家屋の修繕が「才能を無駄にしている」とは思わないばかりか、逆にとても意義があるものだと言っている。「修繕という仕事ははっきりと支援している相手または使用する人が分かってくなくてはなりません。また、工期が短く、短期間に一家族の生活が改善されるのを目にすることが

●ボランティアは一人暮らしの陳乞食お爺さんに対して、家族のように付き添い、相手の身になって日常生活の必要性を考え、素早く支援した。割れた瓦を銀色の昔風の瓦に敷き変えた後、陳お爺さんは快適に自分の家に住むことができた。(左／撮影・廖麗能)



## ハードウェアの修繕で 情を取り持つ

慈済の弱者家屋修繕支援は早期の大半はボランティアたちが計画を立てて支援していたが、あまり専門的なやり方とは言えなかった。今は慈済基金会宮建処が台湾全土で専門家による支援を受け、より完璧に案件世帯の世話をするようになるようになった。

中部地区の経験豊富な訪問ボランティア洪琇娥は、二十数年前、彰化のあるお年寄りの古い家をボランティアと訪れた。お年寄りには九枚のガラスが割れていた扉

や窓をボール紙で補修して、しのいでいた。寒い天気の中、ボランティアは見るに忍びなく、素早く寸法を測り、ガラス屋に連絡して裁断してもらい、再び現場に戻って取りつけた。「とにかく、できることからやりました」

ある日、陳文亮は雲林県台西の案件家屋の修繕が相当な規模になることを知り、ペンキ塗り、水道、電気工事、内装職人など多くの人手を集めて、五台の車で向かった。清掃から工事の開始、そして終了まで丸一日かかってやつと八十歳を超えたお婆さんを家に戻すことができた。

貧しい人を救う慈済の特徴は一家を世話し、あらゆる角度から支援することであり、困難を見ればただちに方法を考えて処置することである。案件の家屋が借家であれ持ち家であれ、建物と空間の人に与える意味は非常に大切である、と慈済基金会台北支部の社会福祉部員である李玉華は言う。建物の環境が陰鬱だったり屋根から雨漏りして崩れたりしたら、住んでいる人は不安なまま生活することになる。この状況を変える能力がなければ、後悔と自責、悔しさに苛まれ、体調不良などを起こすことは想像に難くない。

彼女によると、建物を修繕した後、間

仕切りや使い勝手が変わったため、外で生活している家族が帰って来る時に泊まる部屋ができたり、以前、同級生を家に呼ぶのが恥ずかしかった子供が今では招待できるようになったという。以前は雨になると雨漏りの水を受けるバケツをあちこちに置くのに忙しく、安心して眠ることができなかったが、今、環境が大きく改善されれば、家族の関係や感情にも影響を与えられるかもしれない。慈善の修繕によって家を家族が帰る場所にするのが、ボランティアの使命であり、この強い気持ちによって仕事を成し遂げているのだ。

## 住宅リフォームに気配りを

### 住まいの安全が第一

「安全に暮らす」ために住環境を改善することは、年長者や体の不自由な人にとって重要な「災害対策」という意味を持つ。家一軒、マンション一棟全体の修理から、室内の床の滑り止めの工夫に至るまで、それらは命の安全を保障するために必要なのである。

◎口述・劉慧芳、朱淑芬（慈済基金会台中支部福祉士）  
文・李委煌／訳・黒川章子

社会的弱者の住環境を改善することは、慈済の半世紀にわたる歩みにおいて、一途に続けられて来た活動の一つとなっている。

家とは、雨風をしのぐ場所、安全で安心できる住まいを持つことは生きるための最低条件であるが、社会的弱者の人々は、それは望んで

も得られないものと考えてしまう。私たちは慈済の慈善活動を通じてたくさんの方の貧困家庭と接してきた。みな住環境を改善したくてもできず、ほかに選択肢がないので、みすばらしいあばら家に住み続けるしかないのだ。中には家畜小屋を仕切って住んでいる場合もあり、風雨に吹きさらされ、蛇や虫の侵入に怯え、酷暑極寒は堪え難く、その上いつ倒壊するか、あるいは漏電で火事を起こすかもしれない有様なのである。全く気がかりで心配が尽きない。

政府は社会的弱者への住宅修繕補助予算を毎年組んでいるが、経費には上限があり、審査基準にも制限があるので、多くの場合全面的な援助や直接的改善になっていない。それが慈済の慈善修理の場合、それぞれの家庭に合わせて必要な修理を確実にやっている。要請があればすぐに駆けつけ、どれだけ時間と金額がかかろうと構わず、彼らを親のように思い、「自分の家を建てる」ような気持ちで気を配り、安心して暮らせる温かい居場所を即座に作り上げることにしている。



上人の教えでは、善に大小は関係ないのである。そのため、慈済の住環境改善ボランティアで行う修繕項目は、建物全体の修理から浴室の手すり工事、床の滑り止め工事、バリアフリー措置にまで実に多岐にわたっている。安全に暮らすという最も基本的な権利が保障されるように、という願いがあるからである。それは年長者や体の不自由な人たちにとっては、もう一つ大切な「防災」という役割をも担っているのだった。

上人はそのお諭しのなかで、慈善志業は民族や国境、宗教の違いによって区別してはならない、ただ合法的に必要なことをやり遂げることが大切だとしている。住環境の改善を無償で行うだけでなく、それに携わるボランティアも内容が適切であるかどうかよく考慮する必要があるのだ。家や土地の法的権利が曖昧であったり、持ち主の親族の間で意見が分かれている場合、ボランティアはまず何度も説明し、意志の疎通をはかる。違法となる場合には代替案を提案したり、危険な場所に住居がある場合は速やかに平地など安全な場所へ移るよう指導するのである。

修繕だけでなく、慈済は「人文教育」も重視している。ボランティアは案件を引

き受けた時から「感恩、尊重、愛」の気持ちを胸に抱いて仕事を進める。その人の生活習慣や希望をよく考慮し、時には提案をして調整しながら十分に話し合い、その後もよい環境を維持してくれるように指導を重ねていく。修繕を一つの学びと成長の機会ととらえているのだ。またご近所や居住地域の人たちにも問題に感心をもってもらうよう呼びかけ、相互扶助の精神を啓発している。

私たちは多くの社会的弱者とその居住地域で、慈済ボランティアが無償の善行を行い、自ら考え、最終的に寄付をしたり会員になったり、見返りを求めずに社会を良くしていくこうと努力する姿を数多く見て来た。

一九六七年、慈済は生活苦の中で失明した花蓮県吉安郷に住む独居老人、李阿抛のために家を建てた。これが慈済の「大愛住宅」第一号である。「大愛住宅」とは大愛を家の梁、智慧を壁と考え、真摯な真心でもって建てられ、その精神は変わらずに今日に至っている。私たちはまたこうして援助を願い出してくれる弱者の人たちの気持ちに感謝し、心から尽くしているボランティアや一般市民の奉仕にも感謝を忘れない。

八十六歳の老人、関さんは借家に一人で住んでいるが、その住まいには驚かされた。そこは古いアパートで、一坪から五坪に仕切られた広さの違う部屋が二十二部屋あり、退役軍人や高齢者が暮らしているのだった。浴室は室外にあり共同で使っている。慈済ボランティアはアパートの中の廊下と浴室に手すりをつけ、湯沸かし器を設置した。また壊れていた流し台を新しく取り替えた。関さんが手すりに捕まりながらゆつくりと進む姿を見ると痛ましく、せめてこのような安全措置を施すことができて本当によかったと思う。

統計によると、台湾の年長者の疾病の原因が、劣悪な住環境が引き起こす転倒による確率が高いという結果がある。政府の関係機関や弘道老人基金会、エデン基金会などの民間団体も、社会的弱者や年長者にかわって住居修繕補助を申請している。慈済も積極的に「住環境の改善」を推進していく所存である。浴室や階段、廊下の手すり、室内の照明、床の滑り止め、バリアフリーの設置など、やるべきことは山ほどあるのだから。

お板さんが法の香に浸る

◎ 訳・心榮



## ❖ 人の輪に入って、善の縁を結ぶ

今年の三月、十数カ国からの慈済ボランティアが一斉にバルカン半島のセルビアに集合しました。それは、避難の道中に立ち寄った中東の難民たちに冬着と温かい食物を提供するためでした。この配付活動

は大勢の人の働きかけにより成し遂げられたのでした。

朝のお諭しの時、證嚴上人が「人の集まるところが菩薩の道である」と諭されたお言葉の意味にハッとしました。

慈済が設立して五十年来、ボランティアは数々の大切な経験を積み上げながら、支援活動一つ一つに尽くしてきました。

人と人との間にある愛を大切にし、密接な繋がりがあるからこそ、今回のようにたくさんの国のボランティアが一緒に活動し、合同で菩薩道を歩むことができました。

発心、願かけをした時に、皆はすでに菩薩なのです。



災難の起きた地に駆けつけ、そこで皆が心を一つにして支援するという菩薩道を行い、苦難に遭った人たちを前向きな気持ちにさせ、希望のある未来へと導くべきで

す。

皆が力を合わせていけば、必ず道は開けるのです。

大乗法を実践することは、必ずしも難しいことではありません。恐れず、怠けず、利他の心で以て日々暮らす中で、人との出会いを大切にし、奉仕する機会に努めましょう。そのようにして善行を積み重ねていけば、それまで培ってきた人生の道が広くなり、これこそが希望に向かう菩薩道であると思います。



❖作者：凌宛琪（お板さん）。慈済基金会の職員で、毎朝の「法の香に浸る」法会の入力作業を担当している。そして自身の心得をイラストを添えてインターネットで分かち合っている。





【證嚴法師のお諭し】

◎ 訳・慈願／絵・劉慧全

信心、悲願、行いの上では  
時を無駄にしない

貴い命を大切に

刹那を把握する「信心、悲願、行い」は

生命の精華であり

精彩な人生を織りなす

毎年の中秋節には「国際慈済人医会」<sup>ソイサ</sup>のメンバーが花蓮靜思精舎に集います。今年の中秋節は天上に満月、地上に二十カ国以上の菩薩六百人以上が集まって、道心と愛の心を強めていました。

二十年前、フィリピンの慈済人が村々での施療を始めました。長期にわたって施療を指導していたマニラ崇仁病院の呂秀泉副院長は、一九九六年、スタッフを連れて精舎にこられました。その日はちょうど中秋節でした。それ以後、毎年の中秋節は精舎で私と月見をする約束をして下さいました。それ以来、世界の人医会メンバーの皆が花蓮に帰ってき

て、精舎で月見するのが恒例となり、経験を披露し交流を温めお互い励ましあっています。

慈済の世界人医会のメンバーは異なる国家、異なる信仰の人々の集まりですが、愛の心は信仰の壁を取り除き、同じ信念を堅持して、家から出てこれない貧困、苦難の人々のために、医療スタッフは彼らの元まで行つて治療しています。そして、彼らの家庭にまで関心を寄せ、病苦を理解し、その命の恩人となっています。普段は自分の地元で診察していて、世界の中で甚大な災難が発生した時、人医会のメンバーは災難の最前線に

集まって治療をしています。

慈済人医会は、今から遡ること四十四年の一九七二年九月十日、「慈済貧民施療義診所」が設立されたのが始まりです。

当時功德会は設立して六年でしたが、貧民救済を行っている中で貧の原因は病にあることを発見しました。貧困であるがゆえに医師の診察を受けられず、簡単な病が重病に至るのです。一家の大黒柱が急病に襲われると、経済的に苦しくなり、ついには家庭が崩壊することになります。貧と病は双子のような関係で、貧の上に病が重なるとその苦しみは言

葉では表せません。

ですから私が考えたのは、単なる慈善だけでは根本的ではないということだけです。もしも医療を通して病人をベッドから助け起こし、健康が回復して働く能力があれば、その家庭は貧の苦境から抜け出せるのではないかと考えました。そのために施療の構想を練りました。

私の一番弟子、徳慈法師の母親、黄おばさんは、慈済が花蓮市内で施療所を設置すると聞いて、仁愛街の一階を提供してくれました。黄おばさんが場所を提供してくれ、省立花蓮病院のスタッフが志願して手伝ってくれたおかげで、慈済貧

民施療所を始めることができたのです。

施療所での奉仕だけでなく、志のある医療ボランティアは休日になると、慈済ボランティアについて、花蓮県の南の玉里や光復、寿豊まで出かけて巡回施療を行いました。僻地の医療設備は乏しく、街中の診療所まで出てこれない多くの病に苦しむ人々に医療を提供するためです。仁愛街の慈済貧民施療所は、一九八六年に花蓮慈済病院が開業すると共に廃止となり、十四年間の歴史の幕を閉じました。

現在台湾にある六カ所の慈済病院は、医療品質が肯定されているだけでなく、

当時からの伝統である施療は脈々と受け継がれています。医療スタッフは常に病院から外へ飛び出して、患者を往診し、関心を寄せて、「人医」の精神を実践しています。

### 善法を心に

#### 善念は延々と

#### 心根を護ると

#### 天地は平安になる

中秋節の期間に、台風十四号と十六号が続けざまに台湾を襲い、甚大な被害をもたらしました。その間、風雨の中で多

くの人が自分の持ち場を守って、人々の無事のために尽くしていたことに感謝しています。そして高雄、屏東と台東の慈済ボランティアも、すぐに災害調査と被災者への物資配付に立ちあがっていました。

世の中は、人の心の不正、貪念が山河大地を破壊すると、天災が頻繁に起きます。それに、無明によって心の調和がとれず、人は対立し合い、国と国との間で戦争に発展すれば、人禍をもたらします。

○一三年十二月に戦争が勃発して以来、

国民は国外へ脱出しています。近日情勢はさらに悪化して、毎日八千人以上が隣国のウガンダへ逃れています。国連難民高等弁務官事務所が発表した八月中旬の統計では、南スーダンの難民は百万人を超過していると発表していました。

人の心の対立が深まると、民族は互いに殺戮し合い、人々の生活にもたらされる苦しみは想像を絶するものです。シリアもまた長年の内戦による砲火や流れ弾の威嚇に晒され、人々はやむを得ず故郷を離れて難民となっています。世界で無数の難民が故郷を追われているのは、見るに忍びないことです。台湾で幸せに

暮らしている私たちは、自分たちがどれほど幸せであるか、平安であるかに感謝し、進んでこの世に造福するよう願っています。

人生の無常、束の間の命に何に固執し、何を貪り、気にかけることがあるのでしょうか？ もしも心が得失、煩惱、愛と恨みの情にまとりつかれた時は、実に苦しいものです。たとえ善念が起きても堅持することは難しいのです。

人の善悪は綱引きのようです。いったい善の力が大きいのでしょうか。それとも悪が大きいのでしょうか。人が多ければ力は強くなります。善行と造悪はその



一念にあるもので、時を把握して福業を積みましよう。

新竹のボランティア曾志龍は十五歳の時、やくざ組織に入って、薬物関連の犯罪を犯して捕まり、何回も刑務所を出たり入ったりしては、両親を悲しませ苦しめてきました。その度に改めようと思っても、悪の力はまた彼を引き戻し、人生を無駄に過ごしていました。

家族皆があきらめて彼を見放そうとしていた時、慈誠隊員（慈済の男性ボランティア）の従兄の曾清泉が、彼を正しい道に連れ戻す決心をしました。ほかのボランティアの仲間たちも、刑務所へ面

会に行って曾志龍に関心を寄せている中、「法」と大勢の力でついに彼を正道へ導くことができました。今年四十になった曾志龍は、今では従兄について環境保全を学び、一族伝承の布袋劇（ほていげき、台湾伝統の人形劇）に力を入れましました。時には刑務所へ若者の指導に行つて、「先生」と尊重されるようになりました。

無明が人の心を閉じ込めてしまうので、自分で造った業力は自分ではどうにもなりません。ですが、他人の助けを借りて自分自身も努力すれば解脱することもできます。曾志龍はついにこの世の

監獄と心の監獄から脱け出して、真に自由の身になりました。

皆が善法を心に、その善念が途切れずに善の方向に向かうと、善の力が大きくなつて世の中は平穏になります。

命を大切に

善の良能を尽くそう

福を大切に

人生を着実なものにしよう

花蓮県鳳林に住む林月華は若い時、夫と共に重労働によつて家庭を維持していましたが、夫が事故に遭つて何年も歩

けなくなつても、一人で家庭を担っていました。どんな重労働にも耐えていましたが、ある時期、慈済の救済を受けていました。

家計を維持するため、病院で二十四時間看護の仕事もしました。患者の家族は林月華の細かい気配りに感謝して、お礼に上げたお金を彼女は患者名義で慈済に献金しました。林月華は、この善行によつて患者が一日も早く健康になることを願っていたのです。

貧しくても欲のない善良な林月華に感動しました。しかし長期の過労によつて免疫機能が低下して、全身性エリテマ

トードスになり、医師は重労働をしないように注意しました。

病氣と分かつてても林月華は休むどころか、反対に「命を大切に」との一心で、一秒も無駄に過ごしません。子供たちも成長し、夫の健康も回復して仕事をしているので、自分は職場から離れて一心に慈済の環境保全をすることを決めました。

二〇〇四年、慈済委員の認証を受けた後、最も苦勞とする環境保全を選んで、鳳林で一人目の環境保全ボランティアになり、バイクに乗って村々を回って回収物を集めていました。

えたのです。

林月華は貧しくても心は豊かです。善法を吸収して真心から奉仕をし、慇懃に福を大事にして、この世でよい縁を結んでいます。「信、願、行い」を用いて築いたこの人生は、着実に貴いものです。



今年の人医年会に、トルコの胡光中とシリアのズーマ教授が揃って参加されました。ズーマ教授はシリアに長男と夫人を残していますが、国へ帰ることができません。現在、トルコのメナハイにあ

林月華は家の前の空き地に、大きな日よけのパラソルを立てて、その下を回収物の分類所とし、それが鳳林唯一の環境保全所となりました。ボランティアの呂方釧が林月華の熱心さに感動して、回収物を整理するための鉄板の小屋を建ててくれたので、雨天の作業を心配する必要がなくなりました。

風雨も恐れず山から村々へ資源回収をしている林月華のことが村から村へ伝わり、感化を受けて行動を起こす人が続々と生まれました。今では鳳林地区に百三十カ所の資源回収所があります。平凡なか弱い女性が無数の人に影響を与

る三カ所のシリア難民向けの学校で難民児童の教育に力を注いでいます。胡光中は教授が熱心に慈済に参加していると褒めていました。

大変不幸な目に遭っても、ズーマ教授は全霊を捧げて奉仕しています。今年の二月に台南で地震が起きた時は、メナハイの先生と生徒を連れて街頭募金をしていました。それは蓮の花が泥の中にあっても汚れないかのように、清く美しい姿でした。人が苦難の中にあっても打ちのめされない鍵は、その人自身の一念にあるのです。

《法華經》の中で、仏陀が〈見宝塔品〉

を講釈されていた時、空中高く七宝塔が浮かび上がり、塔の中から「善なり！善なり！」と言う声が聞こえてきました。大衆は菩薩に、仏陀との因縁をお聞きしたいのですが、と言いました。

「宝淨という国に、仏号を多宝という仏がおられました。その仏が菩薩道を行われていた時に大誓願をされました。かりに私が滅度した後、十方国土において法華經を説法している所が私の廟塔であり、經を聴くためその前に人は涌出で、讃言善哉の証明をする」と仏陀はそれを説明されました。

遠い昔の時代、多宝仏が入滅する前に

発願しました。将来《法華經》を講釈する所には、宝塔が目の前に現れるから、一に經を聴けば、二にこの經が世を救う良方であることが実証されるというものです。

諸仏は衆生を憐れみ、広い所までその身を現され、人々が悟ることを願っておられます。宝塔はどこにあるのでしょうか？ その実、人々の心にある靈山塔が、真如の本性ということです。ただ「仏の心を己の心」とすることが必要で、人々はみな仏の分身なのです。自性を反観できると宝塔は目の前に現れます。

至る所にいる苦難の衆生は、あるもの

は環境上の苦、あるものは心靈に苦があります。この世の菩薩である慈濟人は、同じ志の道を進みます。布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の「六度」で衆生の心を慰撫し、善の方向へ誘導しては、所々で機会に応じて教えることです。世界人医会の真心からの奉仕、長年にわたる環境保全の菩薩たちは、人類を護っている十方諸菩薩のようではありませんか！

法を実践する所には仏の分身が現れます。人々が菩薩心を抱いていると、所々に菩薩が満ちてきます。千百億の菩薩の化身が空にあるかのように、苦難の

衆生の布施に応え、衆生の需要に応じて奉仕するということです。皆さんのさらなる精進を願っています。





静思静舎  
生活の禅

柴を担う、水を運ぶことは全て禅です。

今を集中し、法は生活の中で。

心を修養し  
良い苗を植える

野菜畑には生命力が満ちています。

そこは海の呼吸が聞こえ、無限の空に高くそびえ立つ中央山脈と雲海の様々な表情が見えます。そこは修行の場所です。大地を抱きしめ、一つ一つの命と命の対話を行います。

野菜がすすくと大きくなるには、土壌の成分がとても大事です。雨が長く降ったら土がかたくなりますが、土を軟らかくすれば野菜がまた元氣を取り戻ります。土を軟らかくすると、土の中に酸

素がいっぱい入るので、野菜の根が呼吸できて順調に伸び、すすくと元氣に大きくなるのです。

かたい土はまるで長い長い間行われてきた悪い習慣のようです。無明煩惱がいつでも清浄の本性を覆ってしまします。仏法で私たちの心を潤わせ、田のようにまめに耕せば、かたく乾燥した心の田も軟らかくなります。私たちの慧命は生き生きとして富んでくるでしょう。慧命が増えると、心の中の善い種が成長し根も苗も生え、そして善い果実を実らせます。安らかに自由自在に仏法を伝え、法輪を動かすことができるでしょう。

◎文・釋徳澡／訳・慈祖／撮影・黄筱哲



## 呂保璇は娘と 早朝の法の香りに浸る

インドネシアのバタン島は台湾より一時間遅れの時差がある。

早朝の三時半、呂保璇は子供を背負ってインドネシア慈済支部に「早朝の法の香り」の準備に行く。

かつての彼女は社交界の花形といわれていたが、

十四年前に女の赤ちゃんに巡り合ったのが人生転換のきっかけとなった。



三階に住む呂保璇は、夜も明けきらぬ早朝に、ブルーのシャツと白いズボンで

身を整え、身軽に子供を背負って、斜め向かいにある慈済バタン島連絡所の鉄製の門を開けた。中へ入って背中から女の子を下ろすと、女の子は手足を伸ばして慣れた手つきで二階に上がった。

呂保璇もその後から上がって、電灯をつけ、音響機器の点検をすると優しい声が伝わってくる。二人は座って静かな早朝を満喫しながら「早朝の鐘と共に法の香りに浸る」朝のお勤めの時を待っていると、慈済の委員も続々と入ってくる。

これは慈済バタン島連絡所の責任者で

## 因縁の出会い

ある呂保璇と十四歳になる末娘恩恵（グレース）の毎朝の日課だった。

二〇〇三年のある夜、呂保璇はグレースと初めて出会った。その時のグレースは生まれて二カ月の赤子で、体重はたったの一・七キロで、二枚の薄いおくるみに包まれていた。母親は十七歳にもなっていない娘で未婚で妊娠し出産したのだった。

呂保璇は「彼女は私にこの子を育てて下さい」と言い続けていました。私は、自

分には四人の子がいるので、あなたのこの子を育てるわけにはいきません。ただどんなことをお手伝いすればいいのか見にきただけです」と言った。

母親は妊娠中にドイツ麻疹に感染していたため、この子は生まれた時から病気がちで、彼女には育てる能力がなかったのだ。そして「私は誰かにこの子を育ててもらいたいのですが、何人かの人はこの子を見ると立ち去ってしまいました。どうか私を助けて下さい。そしてこの子の病気を治して下さいませんか？」と訴えた。

この哀れな赤子の境遇に呂保璇は、一

言の下に承諾したがその条件として、この子の病気が完全に治ったら母親であるあなたのもとに返すということだった。

医師の診断では下腹部の病気で、その治療は容易ではない上に体重不足で手術ができないとのことだった。「グレースは泣き止まず、泣くことで痛さを表しているようで、当時の私は母親に返すべきかと決めかねていました。それに私の事業は発展し始め、取り扱っている商品はレストランなどで需要が日々伸びていた時点で、事業と善行との間に心の葛藤がありました」と。

そんな時に一筋の希望が現れた。台湾

の取引先である蔡さんが、シンガポールの慈済ボランティアがバタン島で治療を行うこと、ジャカルタ、シガポール、台湾から医師が来て手術も行うという消息をもたらしてくれた。

呂保璇は期待を胸にグレースを抱いてバタン島の治療所へ行った。しかし体重が足りず、現時点では手術ができないと言われて、人目も憚らず声を上げて泣いた。

## 情けは国を超えて

シンガポールで診察中だったある医師

は、呂保璇の血縁もない幼子にける深い情に感動して、慈済シンガポール支部にこのケースを報告した。思いもよらず二日後にシンガポールの慈済人から、私たちが世話するからシンガポールにきて治療を受けるようにと言ってきたのだった。

シンガポールでの手術は成功したが、医師はその他にも心臓に欠陥があることを発見して手術をした。しかし、それ以外に難聴、緑内障、白内障、小脳障害などの疾病もあって長期の治療が必要になる。

バタン島に帰った後、生母に連絡して





●2011年、バタン島の慈済人は菜食を推進するイベントを行った。写真中央の呂保璇は天然香料を使った料理を紹介した。(撮影／蕭耀華)

家へ来るように言って「あなたの子供の手術が終わったから、自分で世話するよう荷物を取りに行きなさい」と言ったが、それっきり消息を絶ってしまった。探してもともとバタン島の人ではなく、親戚もおらず、探しようがなかった。

呂保璇は「この子を誰かにあげようと言っても引き取る人はいないでしょう。たとえいたとしても、大事に育ててくれるか私は心配です」と言って、正式に籍に入れ「恩恵」と名を変えた。四人の子

陳愈宣、陳芝宜、陳明恵、陳政元は、恩恵の病がよくなるように願って三度の食事を素食に改めていた。「苦しくて泣き叫んでいる恩恵が可哀想で貰い泣きました。血のつながりはないけれど、恩恵は私たちの家族です」と言ったことに感動した。

恩恵が国を超えてシンガポールで治療を受けている間、当地のボランティアはいつも呂保璇に付き添っていた。「私は一人でこの子の世話をする覚悟でいました

## 事業との決別

恩恵が国を超えてシンガポールで治療を受けている間、当地のボランティアはいつも呂保璇に付き添っていた。「私は一人でこの子の世話をする覚悟でいました

が、まさかこんな大勢の人が一緒に世話をしてくれるとは、本当に感動しました」と述べた。

呂保璇は二〇〇七年に慈済委員になっただけでなく、経営していたレストランを慈済活動の場所に提供した。事業の成功で彼女は意気揚々とし、ますます増える付き合いや接待を夜遅くまでしなればならず、多くの悪い習慣に染まるようになっていた。「お客を楽しませようといういろいろ思案した結果が、知らず知らずの中に自分の悪習慣となっていました」と言う。夜遅くまでお客相手に酒を飲み、外島までヨットを走らせて買い物するだけ

では満足できず、外国にまでも買い物に行っていた。

「私はブランドの靴、バックや服を買うのが好きでした。家にはたくさんあっても、ただ買いたくだけで、必要品ではなかったのです。以前はただ楽しむだけの生活で、自分さえよかったら、世間や他人に対して何の責任もないと思っていました」と恥ずかしそうに言った。彼女は次第に、自分が今追い求めている快楽は、内心の真の幸福ではないと思うようになっていた。

「私はこんなことでは浪費しているだけだと思うようになりました。これから

は本当に必要な物だけを買います。これが法を心に、法を以て歩むことです」と悟るようになっていた。彼女があらゆる悪習慣を改めた原因の一つには、慈済で汚さないという思いがあった。とくに證嚴法師を尊敬してその教えを守り、「慈済で許されないことは一つ一つ改めていきます」と言う。

彼女が製造している燕の巣は、いろいろな所から原料を購入して加工し、マレーシアに転売している。非常に高い収入を得ることができ、一月に三十キロ売り出せば当時の価格では一キロが三千シンガポールピアで毎月の利潤は何億イン

ドネシアルピアに上っていた。

成功の絶頂だったが、彼女は毅然として、いとも簡単に事業を手放した心境は容易ではない。彼女は「上人は私たちに生

命を大切にすることを教えられました」と話す。この理念はまた彼女にすべてのレストラン経営を閉じさせた。

「私は今慈済ボランティアになりました



●呂保璇は先天性重度障害の恩恵を連れて、今年の4月台湾の台北新店慈済病院で手術を受けさせた。手術は成功し歩行器を使って歩くリハビリを受けている。

(撮影／王占籬)

た。もしもまだレストラン経営を続けていると、肉類などを使って心の悔いになつてしまいます。その上私は神様に実践をする願いを立てました。子供たちが一人前に成長しますように、私は一心慈善活動に投入し、実践行動によって感謝の心を表します」

「上人は、人はさらに良くならなければいけないとお教えになっています。もしも慈善人になっていなかったら、今のような充実した生活を送ることができなかったでしょう。そして一日中人が言うつまらない話に耳を傾け、町をぶらついて意義のない日々を送っていたと思います

す」

「上人はそれと同じようなことをおっしゃいました。明日が先にくるか、それとも無常が先か分からないのだと。彼女は、同じ年頃の健康そうに見えた友達が突然亡くなったことで、この道理がつくづく身に染みて納得がいきました。努力の積み重ねが世間における富であつて、死後は何も持つて行くことができず、業のみが身についていくのだと悟りました」

## 志の提唱

日一日と大きくなる恩恵は、話ができ

ず難聴だが、簡単な手話と人の目を見て意志を通じさせることができ、他人に対して親切だった。彼女の両足の筋肉は委縮して歩けなくなっていた。だんだん重くなり、抱くのが重荷になった呂保璇は、恩恵の足を治す医師を探した。

二〇一六年の三月末、呂保璇は恩恵を連れて台北の新店慈濟病院へ手術を受けにきた。二カ月の療養とリハビリを経て、十四年間立って歩けなかった彼女は、ついに人生の一步を踏み出した。

現在の呂保璇は、慈濟バタン島連絡所の責任者を担当している。「始めの頃は幾多の挑戦にあつて苦労しました。しかし

私は終始『願があれば、自ずと力が湧く』と信じてどんな困難も切り抜けてきました」と。

姉御肌の彼女はボランティアたちの世話をし、すべての人を励まして「私はボランティアたちが自発的に責任をになつて、人から指図を受けなくても任務を果たせる人になるよう願っています。もしも強制したら良い結果が出ず、もう来なくなるかもしれません。上人の法を基礎に、甘んじて事をなし、喜んで受けるなら良い結果が現れるものと思います」と言う。

彼女は、バタン島の静思堂建設にボラ



◎文・釋德仇／訳・慈願

## 人々は観世音

ンティアたちがさらに責任を担うことを願っている。そして未来に社会教育の殿堂とし、また人間菩薩の集う拠点となることを願っている。そしてボランティアは最前線に立ち、より多くの人間（じんかん）菩薩を募って愛を世間にそそぎ、幸せと智慧を広めたいと願っている。

「上人は私たちに『仏の心を我が心に、師の志を我が志とする』とおっしゃっておられます。ボタン島のボランティアが慈善活動だけでなく、毎朝法の薫に浸るお勤めに参加することで、上人の教導を理解するよう願っています。私はこの道を歩けば歩くほど、心は次第に平静にな

ることができました。過去にあったいろいろなことは、昨日がなくなるように消えてゆきます。今日の自分を新たに生きていくことが何よりも大切なことです」と話す。結婚の失敗、事業に打ち込んだ頃の喜びも失敗の悲しみも煙と消え、樂觀的に日々を生き、積極的に善行をしている。

「恩恵に感謝しなければなりません。その出会いがあったから慈済に巡り合うことができたのです。それで私の人生は変わることができました」と言う。呂保璇がこの堅い初心をこれからも持ち続けて歩くよう祈っている。

互いに愛し助け合うこの世は浄土です。

思いを変えると、菩薩は具現する

旧暦六月十九日は「観世音菩薩成道の日」です。この日の朝、《観世音菩薩普門品》を読経しました。證嚴法師は開示をされ、仏の精神を学び、衆生には親しみを以て済度するようにと教えられました。もしも、この世に無数にいる愛ある人が、善念の啓発を受けると、それが無



量の菩薩の化身となって、世界各地で苦難の人を助けるようになりま  
す

台風一号で福建省が洪水の災害を受けた時、現地の慈濟人は十日間  
に延べ九百二十六人を動員し、実地調査と物資の配付に当たっていま  
した。手を差し伸べて被災者を抱きしめ、彼らの苦痛を和らげられる  
ように寄り添い、温かい食事を作って配りました。そして被災者も一  
緒に復興のために働く中で、心が安定し、悲しみが喜びに転じるよう  
願っていました。

すべては心の持ちようによるもので、その一念でこの世は天国に  
も、地獄にもなります。お互いに愛し助け合う世の中が菩薩の浄土で  
す。

法師は、皆が一人でも多くの人間菩薩を集めて、両手を差し伸べ喜  
んで奉仕することを願っておられます。多くの人間菩薩は、この世の  
無数の観世音となって、苦しみの声を聞くと苦難救助に駆けつけま

す。そしてその愛と善行は受け継がれ、永遠に続いてゆくのです。

證嚴法師は中国蘇州から来た慈濟人との座談の中でこのように語  
りました。「菩薩は皆の心の中にあります。考え方を変えたら、自ず  
と菩薩となって現れます。苦難の多い世の中で、慈濟人は人を助ける  
菩薩となる以外に、人々も菩薩になるように導いて、苦難の人が最も  
必要とする所へ一緒に引っ張っていくのです」

法師は「菩薩になりたいのなら、仏法に深く入り、着実に修行に勤  
しみ、道心を堅く持ち、外部の影響を受けないことです。法を一字一  
句漏らさずに聴きましょう。今聴いたことをどのくらいできていなか  
ったか、眼前に写る文字を無駄にしていなか、日々法の薫りに浸っ  
ているが、心は虚ろではないだろうか、と自問しましょう。一人で考  
えるだけではなく、法を聴いて皆と討論すれば、法の一つ一つが心に  
深く刻まれるでしょう」と言われました。

法を求めることは人としての本分であり、自分のために精進するの



は慧命の成長を求めるもので、福の恵みを求めるものではありません。正しいことはやればいいのです。見返りを求めないと反対に『得る』ことがあります。精進と無私の奉仕は、自然に人から認められます。

證嚴法師は、早朝の法会に参加する慈済人が、道場までの交通安全に注意するよう言われました。皆が健康で無事に精進し、智慧を以て気力の困難を克服すれば、證嚴法師は安心され、それが最も良い供養になるのです。

最近、中国の慈済人が水害被災地へ支援に行った時のことです。支援センターのトイレや厨房がとても汚れているのを見て、元の白いタイルが現れるまでピカピカに掃除しました。證嚴法師は、真如の本性とはもともと皆に具わっているもので、ただ累世の無明煩惱に覆われて、洗い清められる機会がなく、無明煩惱の垢が蓄積して本来の姿が見えなくなっているのだとおっしゃいました。

法師は、法を水に譬えられ、真如の本性を見ることができると言われました。そして、皆が「法の薫り」に触れる機会を大切にし、精進法を聴く因縁を把握して、己の心を清め、外に向かつては人心の浄化に努めなくてはならないと励まされました。

## 善言に努め、人を済度するように

アフリカのシンバブエは今年の上半期、エルニーニョ現象のため雨が降らず、旱のために農作物は実らず人民は飢餓状態に陥っております。

證嚴法師は「衣食の足る裕福な人は食糧や物の命を大切にすることです。腹八分目にして、残りの二分を人助けのために寄付しましょう。愛の力を集めて發揮し、この世に愛と善を循環させ、善を積んで福になりますように」と言われました。





人生は無常であり、福となすか、禍となすかは、その一念にありま  
す。人々が明らかな思想をもって、正確な観念、足るを知って小欲で  
あれば、地球も人も健康になり、人類の生活は安定して幸せになると  
おっしゃいました。

スリランカでは五月に水害と土石流が発生し、台湾、シンガポール、  
マレーシアの慈済人が支援団を組織して支援に行きました。七月十三  
日に精舎へ帰ってきて、現地の被害状況や配付活動について報告し、  
支援活動を通して会得したことを話しました。

證嚴法師は皆に、支援活動で見聞きしたことや経験を記録するよう  
に言われました。場所によってさまざまな違いがあるので、前者が奉  
仕した経験を記録に残せば、後者がその経験を活かすことができ、支  
援をスムーズに行うことができます。

證嚴法師は、「人を導くときは、指差してはならず、あごで指図し  
てもならず、強い態度を取ったり、強い言葉を言ったりするのではな

く、善言、やさしい言葉使いが人を導いていく上での秘訣です」と注  
意されました。

《法華經法師品》の中に「如来滅後、其能書、持、読、誦、供養、  
為他人説者、如来則為以衣覆之」とあるのは、仏が經典を護持する人  
に衣をもって彼を庇護していることを描写しています。法師はこれを  
引用して、発心した人に対しては、柔和善意の態度で近づき、その人  
が喜んで受けてくれると、その奉仕は長続きするのだと説明されまし  
た。

## 補導に勤め、包容力を示すこと

ある人が「団体の中で習気<sup>じっけ</sup>が強く、協調性のない人がいたらどうす  
ればよいのでしょうか？」と尋ねました。これに答えて、證嚴法師は  
仏典にある話をされました。



一人の師匠が弟子たちを連れて、叢林の中で修行している時、弟子の中にある小坊主がいました。彼はしばしば戒を破っては盗みをするので、他の弟子たちは不満に思い、師匠に彼を僧団から追い出してくださいとお願いしました。どの弟子たちも修養を積んでいて、どこへ行っても歓迎されますが、この小坊主だけはどこへ行っても歓迎されません。すると、師匠は、「私が彼を愛せなかったら、誰が愛するのでしょうか」と言われました。

習気を改めることは困難ですが、慈済の団体の中では過去に過ちがあっても、縁があつて菩薩の団体に入ってからには皆に愛され、良い習慣のある人々の薫陶を受けて習気がなくなり、人生が一変した人がいます。

證嚴法師は、自分自身で習気を改めて人々に受け入れられるまになるのは簡単なことではないけれども、多くの人が一人を包容するのは比較的容易なことだと話されました。愛によって教え

導くことは、自分も大空を包むような広い心を培うということです。仏陀のような、何人も見放さない心を以て、広く善縁を結んで、この世に造福するようにとお教えになりました。

慈善門とは人間菩薩を集める第一の法門ですから、もしも心に慈悲がないなら、それは仏に学び、法に学ぶことに従っていないのです。法師は入門者には「苦を見て福を知る」を理解させることと言われました。よき慈済人に導くには、その人を慈善訪問ケアと支援活動に多く参加させ、苦難の人と多く接触してもらうことです。

平等愛、見返りを求めない布施

中国で多くの自然災害が発生しています。被災地は広範で、現地ボランティアだけでは力不足ですから、各省の慈済人が協力し



てやらねばなりません。二十四日、中国の慈済委員（慈済の幹部ボランティア）との談話の中で、證嚴法師は、人間菩薩を招集するにはいざ災害が起きてからでは遅く、平時の訓練の時に方法を教えなければならぬと言われました。

現在、福建の永泰、清涼の二つの町で台風一号の被災者に温かい食事を提供しています。晴天の時には、ボランティアは住民に余った野菜を干せば節約になり、そして環境にもやさしいと教えています。この話を證嚴法師は、身を以て手本を示すことは言葉よりも大切なことだと頷きながら、聞いておられました。

「万事は一事から」と言われるように、小さな一事には道理が含まれています。柔軟な心を以て人々とふれあい、楽しみながら人を導くと、相手は喜んでついてきてくれます。これが慈済人の秘訣です。

人としての成就是富裕名利になく、人に対して何事も円満であることです。上人は、シンガポールの慈済人との談話の中で、堅い信心で

仏法を吸収し法を体得するよう励まされております。

人は、大きな間違ひは簡単に懺悔しますが、小さな間違ひはなかなか改められません。

法師はそれを「荒れ果てて長い間放置された家、大型廃棄物などはすぐに片づけることができますが、長い間埃にまみれ蓄積しているゴミはなかなか取り除くできません。過ちがあればただちに直せば、心中の無明煩惱は複製されず、習気も累積しません」と譬えて言われました。大衆の中に入って、菩薩道を行う時、必ずさまざまな習気と困難に会います。

法師は、「大空を包むような広い仏心ほとけこころの境地で、人々を未来仏とみなし、寛大な心、分け隔てのない大愛に、お互い成就することが出来ます。そして、同体大悲の愛、見返りを求めない奉仕があれば、人々は苦から解き放され、喜びを得ることができます」とお教えになりました。



慈濟大事記八、 九月 ……………

訳・済運

|       |                                                                                           |
|-------|-------------------------------------------------------------------------------------------|
| 08・27 | 慈濟カンボジア支部はマレーシア・クアラルンプール支部、ペステック国際会社、カンボジア電力公社の協力を得て、27、28両日、プルサット省クロコ県で施療を行い、3081人に奉仕した。 |
|-------|-------------------------------------------------------------------------------------------|

|       |                                                                                                              |
|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 09・28 | 慈濟骨髓バンクは台北市万華の静思堂で造血幹細胞寄進登録活動を行った。今回は従来の手書きによる登録のほか、スマホでQRコードを読み取り、フォームから直接登録してもらい、作業の効率化を図った。               |
| 09・02 | 台東県の関山慈濟病院で愛を広める中秋節の活動が行われ、潘永謙院長ら病院職員と慈濟ボランティアがケア対象家庭や在宅医療ケア患者を訪問した。病院職員が手作りしたクッキーと日用品を届け、住環境改善の支援と医療奉仕を行った。 |
| 09・03 | ◎南アフリカ・ヨハネスブルグ市ダンフォース区の約300軒の住宅が集まる地区で8月29日、大火事が発生した。慈濟ボランティアはヨハ                                             |

|       |                                                                                                                                                                                                          |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 09・05 | <p>ネスブルグ災害緊急支援センターと共に9月3日、272世帯の被災者に米と毛布、日用品を緊急配付した。</p> <p>◎慈済チリ支部はサンチアゴ友好会館でリサイクルのパソコンの寄贈と菜食料理教室活動を行った。リサイクルのパソコンとプリンター10セットをテムコ省ラウタロ町のチャカブコ教会に寄贈して地域住民の学習に役立ててもらった。また、菜食料理教室を開き、菜食で環境保護しようと呼びかけた。</p> |
|       | <p>嘉義大林慈済病院が立ち上げた「放射線治療総合データプラットフォーム」が2つの特許を取得した。「放射線腫瘍治療データ管理システム技術譲渡」の調印式が行われ、久和医療公司与技術供与に関する取り決めを交わした。</p>                                                                                            |

|       |                                                                                                                                        |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 09・07 | <p>台中慈済病院の地域健康センターは「フレンドリー高齢化体験活動」を開催した。病院の職員が模擬体験を通して老化による不便さへの理解を深め、お年寄りにより親身になって対応することを期待した。</p>                                    |
| 09・09 | <p>慈済が支援するドミニカ共和国ロマナ慈済小中学校で9日、新たに2教室を建設支援することになり、起工式が行われた。ドミニカとアメリカの慈済ボランティアが式典に参加し、生徒に制服と学習用品を配付した。また、10日には第12回卒業式と初回卒業生の集いが行われた。</p> |
| 09・11 | <p>慈済骨髓バンクは9月の「世界骨髓バンクドナーデー」に合わせて、イベント「骨髓の縁による愛」を催した。500人の血液登録者を招いて台北市松山駅前広場で愛を表現した人文字を作り、骨髓バンクへの登録を訴えた。</p>                           |

|                                                                                                          |                                                                                                                                           |                                                             |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------|
| 09・22                                                                                                    | 09・15                                                                                                                                     |                                                             |
| 花蓮慈濟病院の漢方科は「西洋医学、漢方医学合同入院ケアセンター」の設立式典を行った。入院患者は主治医が漢方医との合同治療が適していると同意した場合に漢方医の診察を受けることができ、外来で待つ必要がなくなった。 | 台風14号は高雄、屏東、澎湖、金門などに被害をもたらした。各地の慈濟ボランティアは15日、慈済会員の安否を確かめたほか、被災地を視察し、被災者やケア対象世帯を見舞った。16日から20日まで安心ケア活動を行って、炊き出しをしたほか、日用品や被災状況に応じた見舞い金を配付した。 | 総会は17日に閉会の予定だったが、台風14号と16号が立て続けに台湾に向かっていったため、1日早めて16日に終了した。 |

|                                                                                                  |                                                                                                                                                                                                                                                              |  |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|
| 09・14                                                                                            | 09・12                                                                                                                                                                                                                                                        |  |
| 「2016年度国際慈済人医会総会」が14日から16日まで花蓮靜思堂で開かれた。今年のテーマは「慈済50・慈済病院30・人医会20——過去・現在・未来」で、20の国と地域から620人が参加した。 | ◎マレーシア・ロンフ大通りで12日午前、バス事故が起き、30人以上が重軽傷を負った。クアラルンプール慈済ボランティアは12日から14日まで、被害者が搬送されたクアラルンプール中央病院とアソン大病院、サトン病院、国立病院を訪れ、緊急見舞い金を配付した。<br>◎強い台風14号の来襲に備え、慈済は12日午後4時に防災統括総指揮本部を立ち上げ、各地支部でも13日中までに防災統括センターを設置した。台風の動向と被害状況を把握すると共に、即席ご飯や福慧ベツド、日用品・パックなどの物資を揃え、防災準備を行った。 |  |

# 慈濟

2016 年 10 月 19 日 発行・238 号

中華郵政台北誌字第 909 號執照登記為雜誌交寄

Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴  
発行所 慈濟基金会  
〒112 台湾台北市北投区立德路 2 号  
編集 慈濟日本語翻訳チーム  
杜張瑤珍・張涵  
校閲 山田智美  
電話 (886)02-2898-9000  
FAX (886)02-2898-9920  
E-mail: 019874@tzuchi.org.tw

慈濟基金会日本支部  
〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16  
電話 (03)3203-5651 ~ 5653  
FAX (03)3203-5674  
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw  
tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈濟に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただけますれば幸いに存じます。(日文組編集同人)

逆境やトラブルにどう対処したらいいでしょう？



学業でも修行でも堅い決意を持たなくては  
いけません。逆境に出会った時、自分を鍛練  
する機会がきた、と知るべきです。宝石や玉  
は人々が好むものですが、やはり、切磋琢磨  
して初めて価値が出てくるのです。花蓮には  
玉の鉱山が多く、毎日、大勢の人が踏んでいて、  
人の目に留まるようなものではありません。  
何年も前、あるタイの僧侶が花蓮に来た時、  
彼は花蓮の玉石が大好きだと言っていました。  
そこで、私は大きな玉石を探して来させまし

た。その半分を仏像に彫刻して人々に拝ませたり  
触らせたりする為に彼に持ち帰らせました。そし  
て、残りの半分を私たちの精舎の出入り口に敷き  
ました。大勢の人に踏まれて二〇年近くになりま  
す。同じ石でも、磨かれたものと原石ではこれほ  
どの差があります。逆境とは玉石の原石のような  
もので、磨かなければ光沢はでません。

逆境に出会ったら、私たちは感謝すべきです。  
この上ない縁を惜しみ、この世に現れて説法して  
くれたことを感謝するのです。常に優しい気持ち  
で、喜んで受けるのです。人間は堅い決意で以て、  
諸々の逆境を受け止め、平静な心でそれを良い方  
向に転換するのです。仏教ではあらゆることを教  
えています。心が穏やかでない時は、仏法に多く  
接したらよいでしょう。